

令和元年6月27日現在

機関番号：84604

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2014～2018

課題番号：26284104

研究課題名(和文) 東大寺を中心とする南都の未整理文書聖教の復元的調査研究

研究課題名(英文) Restoration research of unsorted old documents and religious records in Nara city centering on Todai-ji Temple

研究代表者

吉川 聡 (YOSHIKAWA, Satoshi)

独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・文化遺産部・室長

研究者番号：60321626

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 10,100,000円

研究成果の概要(和文)：東大寺に所在する、未整理の古文書・聖教の調査を進めた。そこには、東大寺・奈良に関する多様な新出資料が存在した。

なかでも、明治維新期の資料からは、東大寺・興福寺の神仏分離の状況が読み取れた。両寺の間では対応に違いがあり、それは両者の歩んだ歴史の違いを反映していることも推測できた。

また関連して、興福寺関係資料を調査することになった。その中には興福寺承仕関係の中世文書も存在した。また東大寺中性院の襖・屏風の下張り文書や、奈良町の個人蔵資料も調査し、興味深い新出資料を見いだした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

東大寺をはじめとし、奈良の各所には、未整理のまま保管されている歴史資料が膨大に存在する。それらは現状では研究に利用することは不可能であり、資料が失われる危険性も大きい。そのような資料をできる限り調査して目録を作成したことは、資料の保存・活用のための基礎作業である。今回の調査研究からは、さらには、明治維新期の南都寺院の動向が従来よりも明確になった。当時の僧侶たちがとった判断・行動は、現代人の感覚からは奇異に見える点もある。ただし、そこには当時の社会情勢・歴史的経緯もあったことが推測できた。

研究成果の概要(英文)：We proceeded with the investigation of the unsorted old documents and the religious records in Todai-ji Temple. There were various new historical records related to Todaiji and Nara.

Above all, from the records of the Meiji Restoration period, the situation of the separation of Shinto and Buddha of Todai-ji and Kofuku-ji was read. There was a difference in the correspondence between the two temples, and it could be inferred that it reflects the difference in the history of the two.

In connection with it, we decided to investigate Kofuku-ji related documents. Among them were medieval documents related to Kofuku-ji. In addition, we examined the undercover of Todai-ji Temple Chusyojin House and the individual collection documents of Nara, and found out interesting new historical records.

研究分野：日本史

キーワード：史料学 東大寺 興福寺 奈良 神仏分離

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

南都の寺院には、文書・聖教などの資料が、多く存在している。特に東大寺には、未整理のまま保管されている文書・聖教が、多数存在する。それらを「新修東大寺文書聖教」と名付け、平成 13 年度以降、科学研究費補助金の事業として、調査研究を進めてきた。全体で 125 函あまりの資料群で、平成 25 年度までの調査で、そのうちの 75 函ほどについて、一通りの調査を終えた状態だった。また他所にも、関連資料や、似たような未整理資料が存在すると予想された。それらは数量が膨大で、断簡や近世資料が多いと予想されたため、調査が後回しにされ、従来、全く手つかずのままに放置されてきたものである。

それらの資料は目録も皆無であるので、何があるのかさえ誰にも分からず、調査しない限りは、研究に用いることが不可能な状態にある。それゆえに、散逸や、経年に伴う損傷の恐れも大きい。

2. 研究の目的

東大寺には、未だに整理されておらず、詳細不明な文書・聖教が大量に存在する。研究代表者らはこれまで、その資料群を「新修東大寺文書聖教」と名付け、科学研究費を用いてそれらの調査研究を進めて実態解明につとめてきたが、未だ、道半ばの状況である。それらの基礎的な調査をおこない、資料の実態解明に努める。

調査し終わった資料はデータ整理を進め、資料の整理と、研究者の利用に対する便宜を図る。

それらの未整理資料を検討して、東大寺の文書・聖教の、伝来過程の全貌把握につとめ、南都関係資料全体の伝来に対する理解を深める。

上記の作業により、南都の仏教・寺院・社会等の研究を進める。

3. 研究の方法

時期を決めて、東大寺図書館に研究代表者・研究分担者・連携研究者・研究協力者らが集まり、未整理資料を集中して調査する期間を設ける。そこでは、未整理資料を悉皆的に調査して、全点にラベルを貼付し、書誌事項をパソコンに入力する。また主要資料は写真を撮影する。

また、写真撮影した資料については、別途、詳細に検討して、重要資料は翻刻する。

そして、資料群の伝来過程について考察し、南都寺院資料に対する理解を深める。

そのような調査研究を、当初計画では平成 26 年度～30 年度の 5 年間実施する計画だった。

4. 研究成果

上記の見通しのもと、平成 26 年度～29 年度の 4 年間、研究を実施し、下記の事実などが明らかになった。

(1) 新修東大寺文書聖教の未整理資料に関しては、東大寺図書館において悉皆的な調査を継続しておこない、第 78 函～第 87 函の目録を作成した。資料の大半は近世文書で、なかには、手向山八幡宮関係の古文書や、周防国衛関係文書、財政運用関係資料など、研究分野が薄い資料群も存在した。

(2) その中の手向山八幡宮関係文書には、明治維新の神仏分離の際に、東大寺と手向山八幡宮が分離した折りの関連資料が含まれていた。その資料は、研究協力者の坂東俊彦氏が検討を加え、本科研終了後の平成 30 年 11 月に開催された、第 17 回ザ・グレイトブッダ・シンポジウム「明治時代の東大寺 近代化がもたらした光と影」においてその成果の一端を報告した。今後、論文として発表する予定である。

(3) また、新修東大寺文書聖教の一部である中村純一寄贈文書については、撮影した写真から、より詳細な検討をおこなった。中村純一寄贈文書は、江戸時代に興福寺の承仕を世襲していた中村家の分家に伝来した資料群で、それを戦後に東大寺に寄贈したものである。その内容は、興福寺の承仕としての職務に関わるものである。なかでも、江戸時代後期から明治初年にかけて詳細な日記を記していることは注目される。そこからは明治維新期の興福寺・奈良の動向が詳細に読み取れた。その内容を分析し、その成果を吉川聡「廃仏毀釈 発見された奈良・興福寺僧の日記」として『月刊住職』206 号に発表した。

興福寺は、南都寺院の中で、廃仏毀釈の影響を最も大きく受けた寺院である。すなわち、慶応 4 年(明治元年、1868)に神仏分離令が發布されると、その直後に、興福寺は廃寺となり、明治 14 年に復興する、という経緯をたどる。その興福寺廃寺の際に、寺僧が何を考え、どう行動したのかがかなり明確になった。

すなわち、興福寺は大和国最大の寺院であり、寺僧の上層部は京都の公家の子弟で占められていた。鳥羽・伏見の戦いの直後、奈良に進駐してきた新政府軍を受け入れたのは興福寺であり、興福寺が新政府軍の宿泊・食事の提供等、雑務の全般を担っていた。その流れの中で新たに奈良県が発足し、やがては興福寺境内に奈良県庁が置かれることになる。

興福寺の上層部はそのような動向の中で、いち早く、復飾を決定する。彼らの多くは京都の公家の子弟であり、新政府の方針に極めて協力的だった。

しかし彼らの下には、衆徒・承仕など、さまざまな寺僧集団が存在した。下位集団の寺僧は、

多くが地元の奈良で代々興福寺に仕えてきた家柄である。彼らは、上層部が復飾を決定した後、寺僧集団ごとに、復飾の意志を諮問されている。彼らの最大の願いは、家業を存続させることであり、上層部の復飾決定には不安を感じていた。しかし上層部が復飾を決定したからには、家業存続のためには、それに従うしかないと判断していた。このように、明治維新時に興福寺僧たちがとった選択には、政治と宗教とが密接に関連し合っていた、当時の社会情勢が色濃く投影されていた。

上記の経緯の結果、興福寺は一山あげて復飾し、僧侶は春日社の新神司になった。神に仕えることには、当時の興福寺僧は違和感を抱いていなかった。それは、彼らはまさに神仏混淆の世界に住んでいたためである。

その後、明治14年に興福寺は復興するが、復興後の興福寺は政治色が皆無の仏教寺院として再生する。それは、政教分離・神仏分離が達成された、近代的な寺院の姿だと評価することも可能だろう。

従来、奈良の明治維新时期は、変革期のために資料が少なく、大きな変化がありながら、その過程には不明確な点が多かった。(2)(3)の研究によって、興福寺・東大寺における神仏分離の状況が、より明確になった。神仏分離への対応は、興福寺と東大寺とではかなり異なっていた。それは、両者が歩んできた歴史の違いを反映している。そして神仏分離への対応の違いが、その後の歴史の違いにも大きな影を落としている。そのような事情を、今回科研による調査研究で明確にできた。

(4) また研究の進展の中で、上記の中村純一寄贈文書と元来は一具だった資料群が、個人蔵で存在していることを把握した。その資料群についても、借用して、悉皆的な調査研究を実施した。これも興福寺承仕関係資料で、一部には、中世文書の写しも存在し、室町時代の興福寺承仕の存在形態が読み取れた。その中世文書の一部は、翻刻して考察を加え、本科研終了後の平成30年6月に、吉川聡「興福寺承仕関係文書から」として『奈良文化財研究所紀要2018』に公表した。

(5) また、東大寺中性院の襖・屏風に、下張り文書があることが判明した。そこで研究分担者の横内裕人が中心となって、下張り文書を剥がす作業を実施した。さらには内容を精査し、公表すべく準備を進めているところである。

(6) その他、奈良町の個人蔵資料についても調査を実施し、戦国時代以降の資料を見いだしたので、本科研終了後に、さらに詳しい検討を実施した。

(7) ただし一方で、上記のように、当初予定を上回る未整理資料が見いだされたため、当初計画の期間内には、体系だった成果をまとめるのは難しい見通しとなった。そのため、最終年度前年度申請をおこない、本科研は平成29年度で終了とし、平成30年度からは新たな科研として「南都の未整理文書聖教にもとづく寺社とその周辺社会の調査研究」を立ち上げ、調査研究を継承・発展させることとなった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 12 件)

- 吉川 聡、封をする経巻 如法経の巻緒について、古文書料紙論叢、2017、225-232
横内裕人、東大寺大仏殿修正会張文の形態と機能 請定・交名にあいた裂穴、古文書料紙論叢、2017、559-573
畠山聡・遠藤基郎、東大寺図書館所蔵記録部中の中世史料、古文書研究、83号、2017、46-51
山下秀樹・吉川聡、生駒長福寺本堂と木札の調査、木簡研究、39号、2017、165-211
吉川聡、興福寺二条家史料の抜書集、奈良文化財研究所紀要、2017号、2017、24-27
横内裕人、東大寺の記録類と『東大寺要録』、東大寺の新研究、2号、2017、473-493
吉川 聡、廃仏毀釈 発見された奈良・興福寺僧の日記、月刊住職、206号、2016、114-12
吉川 聡、薬師寺僧の官位とその補任の様相、奈良文化財研究所紀要、2016号、2016、22-25
吉川 聡、執金剛神から蔵王権現へ 天神信仰に及ぶ、東大寺の新研究、1号、2016、565-593
富田正弘、中世における牛玉宝印の料紙について、東京大学経済学部資料室年報、5号、2015、55-75
小原嘉記、鎌倉初期の東大寺再建と栄西、ザ・グレートブッダ・シンポジウム論集、12号、2014、55-69
富田正弘、中世文書の料紙形態の歴史的変遷を考える、歴博、184号、2014、15-20

〔学会発表〕(計 7 件)

- 吉川聡、古文書調査と自然現象、第6回 CODH セミナー 歴史ビッグデータ～過去の記録の統合解析に向けた古文書データ化の挑戦～、2018年

遠藤基郎、東大寺領大井莊の史料論 鎌倉期から室町中期まで、シンポジウム「カレントモデルとしての美濃国大井莊研究」総合人文科学研究センター研究部門「トランスナショナル社会と日本文化」、2017年

坂東俊彦、東大寺二月堂修二会の儀礼空間、儀礼文化学会 第27回関西支部秋季学術大会(招待講演) 2017年12月2日、松尾大社

横内裕人、前近代における書跡・古文書修理の諸相、京都大学総合博物館連続土曜講座、2017年2月4日、京都大学総合博物館

吉川 聡・山下秀樹、生駒長福寺の本堂と木札の調査、木簡学会、2016年12月3日、奈良文化財研究所

吉川 聡、『黒草紙』からみた古代中世の薬師寺、東京大学史料編纂所共同利用・共同研究拠点特定共同研究「薬師寺中世史料の研究」公開講演会『古文書が語る中世の薬師寺』、2015年11月29日、法相宗大本山薬師寺まほろば会館

遠藤基郎、中世東大寺の燈油関連組織 御油目代・勸進所油倉・大仏殿燈油聖・大仏殿燈油納所、日本古文書学会大会、2015年9月13日、就実大学

〔図書〕(計 1 件)

奈良文化財研究所(編集担当:吉川聡)、仁和寺史料 目録編〔稿〕三 仁和寺御経蔵聖教目録稿三 第五十一函～第七十六函、2017、268

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年:
国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年:
国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名: 渡辺 晃宏

ローマ字氏名:(WATANABE, akihiro)

所属研究機関名: 独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所

部局名:

職名: 副所長

研究者番号(8桁): 30212319

研究分担者氏名: 横内 裕人

ローマ字氏名:(YOKOUCHI, hiroto)

所属研究機関名: 京都府立大学

部局名: 文学部

職名: 教授

研究者番号 (8 桁): 50706520

(2)研究協力者

研究協力者氏名 : 遠藤 基郎

ローマ字氏名 : (ENDO, motoo)

研究協力者氏名 : 富田 正弘

ローマ字氏名 : (TOMITA, masahiro)

研究協力者氏名 : 坂東 俊彦

ローマ字氏名 : (BANDO, toshihiko)

研究協力者氏名 : 栗山 雅夫

ローマ字氏名 : (KURIYAMA, masao)

研究協力者氏名 : 水谷 友紀

ローマ字氏名 : (MIZUTANI, yuki)

研究協力者氏名 : 小原 嘉記

ローマ字氏名 : (KOHARA, yoshiki)

研究協力者氏名 : 竹貫 友佳子

ローマ字氏名 : (TAKENUKI, yukako)

研究協力者氏名 : 大田 壮一郎

ローマ字氏名 : (OOTA, soichiro)

研究協力者氏名 : 長村 祥知

ローマ字氏名 : (NAGAMURA, yositomo)

研究協力者氏名 : 綾村 宏

ローマ字氏名 : (AYAMURA, hiroshi)

研究協力者氏名 : 馬場 基

ローマ字氏名 : (BABA, hajime)

研究協力者氏名 : 山本 崇

ローマ字氏名 : (YAMAMOTO, takashi)

研究協力者氏名 : 山本 祥隆

ローマ字氏名 : (YAMAMOTO, yoshi taka)

研究協力者氏名 : 高田 祐一

ローマ字氏名 : (TAKADA, yuichi)

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。